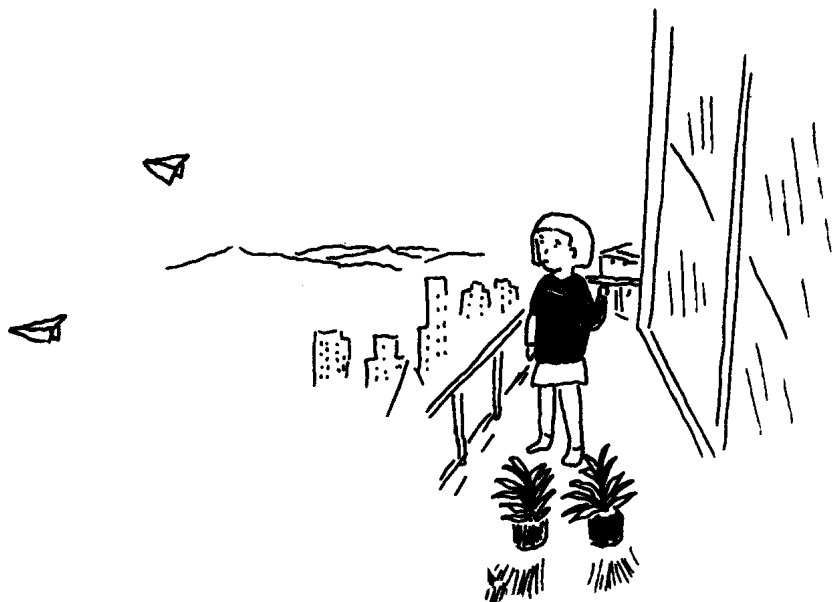


フタゴサウルスの襲来

かんべむさし

Kanbe Musashi





フタゴサウルスの襲来

かんべむさし

Kanbe Musashi

中央公論社

フタゴサウルスの襲来

一九九五年三月二五日 初版印刷

一九九五年四月七日 初版発行

著者 かんべむさし

発行者 嶋中行雄

印刷所 凸版印刷

製本所 凸版印刷

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二一八-七

振替 〇〇二二〇-四一三四

© 1995 CHUOKORON-SHA, INC.

Printed in Japan

ISBN4-12-002423-7

フタゴサウルスの襲来―――目次

第1章 ゼーンゼン本気にしなかった

第2章 男どもはうろたえた——誕生

第3章 ETと仏が泣き始める

第4章 強烈、ダブル泣き

第5章 疲労と緊迫、小さな喜び

第6章 わずかに変化が見えてきた——生後3ヵ月

第7章 雨は降る降る 双子はわめく

第8章 支援が必要 人手も必要

第9章 幅広バギーがやってきた——生後6ヵ月

112

99

86

73

60

47

34

20

7

第10章

オール・キャスト再登場

125

第11章

興奮・立腹・長いメモ

138

第12章

成長がめだつ

151

第13章

乳児・幼児・児童——生後9ヵ月

164

第14章

ああ、早くもこの季節か

177

第15章

歳末ぐったり月間

189

第16章

まねして、あっさり歩きだす

201

第17章

三年かかると思いきれ

213

第18章

ようやく1歳 危険がふえる

225

装幀——太田和彦

装画——沢野ひとし

フタゴサウルスの襲来

第1章

ゼーンゼン 本気に しなかつた



喜怒哀楽、爆笑号泣。

大量のメモを駆使して、双子が生まれた家庭の、人間模様をお伝えしようという試みである。
細部のフィクション化と、登場人物の仮名使用をお断りしつつ、まずは舞台説明から始めることにする。

ラメール・ニュータウン。

これは、大阪から電車で約二十分の住宅都市にできた複合団地であり、中心部は高層住宅棟が林立する区域となっている。たとえば我が家は二十七階建て棟の十四階なのだが、それがどの程度の高さであるのかは、次のエピソードから想像していただきたい。

夏の夜、ベランダのガラス戸や窓など、すべてあけていても蚊が入ってこない。たまに入ってくるのは、生意気にもエレベーターに乗ってあがってきたやつなのだ。また、棟の裏手に小さな川があり、そのむこうはショッピング・センターや銀行などのゾーンになっている。バーゲンのときなど、センターの屋上からアドバルーンがあがるわけで、その赤い大きな球が、ちょうど我が家の窓と同じ高さでふわふわするのである。

なお、自宅の間取りは3LDK。

ただし、一部屋が書斎という名の本置き場になってしまっているので、実質は2LDK。まあ、とりあえずの舞台はこんなところであって、そこに人間が配置されるのだ。

一人目は僕、つまりかんべむさし。

二人目が、その妻光子。

三人目が、長女めぐみ。

そしてそれを取りまく人々として、僕の母、妻の父母、妻の妹、近所の夫人たちなどが順次登場することになっている。

舞台の上で人間が動けば、そこにおのずと、何らかのドラマが生まれる。それを点描するために使われるのが、日記を兼ねたメモ・ノートなのである。

これは、印象に残った経験や見聞談などを、とりあえずそのまま書いておくというもので、高校時代に始めて現在もつづけている。

たとえば、この物語が始まりかけていた1984（昭和59）年6月ごろのページをひらくと、こういうことが書いてあるのだ。

*昨日の夜、梅田地下街でバーテンの服装をした若い男とサラリーマン二人とが、殴りあい蹴りあって喧嘩をしていた。バーテンの顔は異様に青白くなっており、あきらかにノルアドレナリン激増の戦闘状態。マスターみたいな人が追いかけてきて割って入り、ようやくおさまったのだった。

*朝、仕事場へ来る途中、梅新の交差点で日焼けして真っ黒の男が道を聞き、「京都へはこの道でいいのか」とのこと。歩いていくつもりらしいので驚き、「いいけど遠いよ」と、何なら電車賃くらいはと思いつつこたえろと、そんなものの平気らしい雰囲気。何と福岡から歩いてきたというのである。持ち物は小さなバッグひとつで、かなり汗臭い。そのまま行ってしまったのだが、どういう男なのだろう……

まあ、早い話が〈何でも帳〉であるわけで、だから当然、そのなかには次のようなメモもまじってくることになる。

*光子、下の公園の草取り当番。めぐみも一緒に行き、シーソーから落ちてひたいにタンコブをつくった。昼はテーブルで頭を打ち、夜は風呂からあがった途端、足をすべらせてもろに転倒し、わんわん泣いている。本日、デカアタマ厄災の日曜日なるや？

これらのメモでもわかるとおり、僕は大阪市内に仕事場をつくっている。会社勤めのち作家

になって以来、ずっと自宅で、深夜、原稿を書いていたのだが、健康上の理由もあって途中からあらためた。毎日通って日曜は休むという、サラリーマン風の昼型パターンを基本にし、この頃はすっかりそれに慣れていたのである。

ともあれ、以下においては、こういった断片メモをふんだんに紹介していくつもりでいる。その集積が何をかたちづくり、どんなアトモスフィアを漂わせだすか。それを楽しみに、さて、幕開きでございます――

* 6月10日(日) 一日休養。光子は午後から、何かの講演会を聞きに行く。こちらは昼寝したり、めぐみを連れてセンターへ行ったりする。ダイエーでペットの亀を売っており、めぐみ、その歩き方を見て不思議な表現をする。いわく、「大きい亀はびょんごびょんご、小さい亀はびゃんがびゃんが」

タンコブをつくったり座り込んで亀を見つめたり、まずまず幼児らしい日々をおくっていた長女は、このとき2歳8ヵ月。結婚が遅かったので、僕は36歳、妻は30歳だった。

朝、ラッシュの時間帯が過ぎた頃に僕が出かけ、夜、人と会ったりする予定のないときには、おおむね8時過ぎに帰ってくる。

その間、母と子が二人で何をしているのか、詳しく聞いたことはないが、ほぼ毎日の習慣になっていたことは覚えている。

棟の前に、となりの棟と共用の小さな公園があつて、砂場やブランコが揃っている。そこへ行つて、長女は同じ年ごろの子供たちと遊び、母親たちはそれを見守りがてら、井戸がないからベシチで会議をするのである。

そして朝と夜には、もともと子供は好きだし、見ているとおもしろいので、僕が遊ぶ。

*カセット用のマイクが壊れたので、めぐみのオモチャにしてやると、いきいきとして歌をうたいだす。そして、「お名前は」「おとしは」「何をうたいますか」などと、ポンキッキかニコニコブンか、テレビの幼児番組のまねをしだす。そこでこつちがマイクを持って同じ質問をしてやると、照れたような困ったような顔になり、そのあと、まさに番組出演者そのままの口調でこたえ始める。影響、恐るべしである。

思うに、このころの長女にとつての周囲とは、ほぼ全面的に「快」をもたらしてくれるものであつたに違いない。それはそうだ。お父さんもお母さんも、おじいちゃんもおばあちゃんも、おばちゃんも、みづんな独占できるのだ。

*6月30日(土) 光子、先日より吐き気がつづくとして病院へ。当方、めぐみの番をして待つ。結果は予想どおりにて、来年2月に出産とのこと。しかし最初のときと違い、二人とも、割合淡淡としたものである。

親がそんな具合だから、長女にしたところで赤ちゃんができるのだと聞かされても、急に何かを感じるといふこともなかったと思われる。

「うん。何となく様子がおかしいなあ」

言語化しての思考かどうかは別として、彼女がそう感じ始めたらしいのは、このあと、母親のつわりがひどくなってきたからなのである。

* 7月3日(火) 午後、『笑い宇宙の旅芸人』書く。光子、つわりひどくて吐いたと電話してきたので、夕食は外ですませ、早めに帰宅。夜、ゲラの校正をしてしまう。

これを皮切りに、7月8月、大方9月の中旬まで、同じようなメモが断続している。

* 暑さのためか取材疲れか、どっとしんどくなって仕事不能。少し横になる。光子より、つわりひどいと電話。早めに帰宅する。

* 日曜日。昼、母親が寿司を持ってきてくれる。食べたあと、めぐみ、あんまり外に出てないというので散歩に連れていく。

* つわりひどいと電話あり、食事の支度不能であると。デパートの地下でおにぎりやおかずやサラダなど適当に買って帰り、光子寝ているので、めぐみと二人で食べる。何となく、ものさびしいような雰囲気なり。

ここでちょっと注釈を加えておくなら、寿司を持ってきたのは僕の母で、電車でなら二駅となりの街に住んでいる。

このときすでに70歳で、オールド・コーラスのクラブで歌ったりしているから頭はぼけてないが、やはり足腰は弱くなっている。骨折でもされたら困るので、孫の世話もあり力の必要なこ

とは頼めず、たまに留守番をしてもらう程度にしていたのだった。

なお、僕の父親はもうとうに亡くなっているの、へおじいちゃん」という人は、妻の父親一人ということになる。

へおばあちゃん」が二人登場するので、以下必要あるときには、こちらをコーラスのおばあちゃんと呼ぶことにしよう。

暑い日がつづき、つわりもつづく。

*電話あり、本日は中華風のそうざいなど買って帰り、めぐみと食べる。しかしこういうものを食べていると、つくづく栄養面情操面ともに良くないと思う。一応はまともな店の製品をちゃんと皿に盛りわけて食べさせてはいるのだが、やっぱり家庭の夕食ではないのだ。ま、いまは仕方ないかな。

*夜、めぐみが外に出たがる。ここしばらく、公園にもあまり行っていないとのこと。連れて出て、ダイエーから消防署のあたりを手をつないで歩く。暗いなかにひとときわかるい車庫があつて、真っ赤な消防車が止まっている。夜空をバックに、見あげる高さで高層棟の明かりが連なっている。そんな夜の団地の光景というものを、この子は大人になってからどう思い出すかなあと思ったりする。

つわりのひどき、双子だったのだから当然かもしれないと、あとでは思ったのだが、このときにはまだそれはわかっていない。暑さでバテており、長女はかまってほしくてまとわりつくので、

妻は精神的にも参ってきたらしく、こんなメモもまじっている。

*日曜日。午前中、めぐみをベランダで水遊びさせる。午後はダイエーへ一緒に行き、夕食は焼き肉と決めてその材料を買う。光子少しめげており、異常出産の心配など始めているので、カウンセリングをする。まあ、つわりが終われば元気になるであらう。

しかし、これを転記していま思ったのだが、偉そうに書いている僕は、つわりの何たるかを全然知らないのである。知識と見聞はあれども、実感は知る由もない。なのにカウンセリングとは、俺もいいかげんな男、大阪弁で言うならエエカゲンナヤッチャナと、苦笑せざるをえないのだ。

だから悩みの相談室もその場限りの効果しかあらず、しかし暑さつつわりはおさまらないので、遂に妻は救助信号を発したらしい。

*夕食仕入れて、早めに帰宅。本日は煮め風でまとめてみた。月曜日に、鳥^{とす}栖のおばあちゃんが来てくれるとのこと。

*おばあちゃん到着。光子、たちまち声も表情も動作も元気になる。安心したのだろうか、
「タヨリナイヤッチャナ！」である。

むろん、これを強調したために前にエエカゲンナヤッチャナをふっておいただが、さて、ここで妻の家族の登場となる。

義父は葉の三共を定年退職後、九州三共の工場長になっていて、夫婦二人の社宅住まい。この